

「政府はわれら労働者、すなわち、鉄工、木工、石工、木挽、左官、機関手、印刷工……鉦夫、農夫、等、すべて労働をするものの権利と利益を保護するため適当なる法律を制定すべし」

労働をなすものが労働者だと、はっきり規定しているのだ。そしてこれは当時においてはことわるまでもない常識であった。

(三)

前節で私は、労働者という言葉に対する二つの受けとり方について書いた。その二つの間の落差は大きい。その落差のその後の推移をもう少し追ってみたい。それは言葉をいじりまわして、考証という遊びにふけるように見えるかも知れないが、言葉への対し方、受け取り方とは意識構造のあらわれ方なのだから、この作業を通して、労働者の意識の推移を追うことになる。

横山源之助の「日本之下層社会」が明治の労働者の実情を語るすぐれたリポートであることは、多くの人のよく知るところだが、それより三年おくれて刊行された、「職工事情」五巻（明治三十六年）は、日本政府がおこなった労働者実態調査としてはもっともすぐれたものと言えよう。その「職工事情」の中に次のような当時の鉄工

についての記述がある。

「徒弟ニ在リテモ少シク技術ヲ解スルニ及ベバ該工場ニ於テ徒弟タルヨリモ他ノ工場ニ転ズルトキハ相当ノ賃銀ヲ得ルノ望アルガ故ニ、徒弟年期限了ヘズシテ妄リニ他ノ工場ニ転ジ所謂渡リ職人トナル者少シトセズ」

当時の工場が徒弟制度を踏襲していたことがこれからでも知れるが、読者は右の引用から、前節で私が書いた西行を連想しないだろうか。「職工事情」の記述はおそらくそれが実情であり、その通りであつたろうことはうたがう必要はないだろう。しかし、それとともに工場から工場へと渡り歩きながら、自分の技術を磨こうと心がけた職工もいたであろうことも容易に想像出来ることだ。事実、私たちは草創期の日本近代産業をになった人たちの中から、後に工場経営者や技師となった人の伝記を読むことで、そうした例をひろうことが出来る筈だ。

あの幕府が開設した銃砲製造工場では、労働者は職人と呼ばれ、鳶人足からこれを採用した例を私たちはすでに見ている。また労働組合設立の下相談の場が、博打場と早変わりし果ては吉原へ繰込む騒ぎとなった明治の鉄工たちの一幕も見ている。日本近代産業がはじめにどこからその労働力を得ようとし、それをどう待遇し、どう育てたかはこれからもおよそ見当がつく。

初期の工場労働者には、いわゆる職人出身もいたろう。貧しい農家出身もいたろう。まれには落ちぶれた士族出身もいたろう。しかし彼ら全体を覆っていたのは、階級意識とよぶようなものでなく、まったく職人氣質とよぶべきようなものであった。それは大正をこえて昭和の第二次大戦後まで尾を引く。

しかし職工と職人との意識は目に見えぬ速度で差をひろげて行く。その要因は一つには労働の質の差であり、二つには近代産業の体質であり、三つには大正期の労働運動であると言えよう。

治安警察法で大打撃を受けた労働運動は、明治四三年の幸徳事件の大弾圧で息の根を止められたかに見えたが、大正五、六年頃になると序々に回復し、大杉栄の「労働運動」は大正八年、「熔鉦炉の火は消えたり」で有名な八幡製鉄の大ストライキは大正九年、友愛会が労資協調的なそれまでの姿勢をかえその名も総同盟と改めたのが大正十年、そして日本中を焼きつくすようにひろがった米騒動はそれらより少し早く大正七年、というように幾つかの事件を数えることが出来る。

労働運動が盛んになった原因は手短かにいえば、日露戦争、第一次大戦をへてふくれ上った資本主義が、それ以前とはくらべものにならないほど多数の工場労働者を

生み出したこと、職人その他と違って工場労働者は同一場所であつたに働くので連絡しやすいこと、大戦中の好景気とその後の不況が労働者を刺激したこと、米騒動が直接的な体験となって戦う自信を持ったことなどと言えようか。

そして、労働運動が盛んになったことは、労働者自身の意識が明治三十年前後とは変ってきたからであるとともに、そのことがまた労働者の意識を変えていったという事が出来る。

工場労働と職人労働の違いは、一方が機械を媒介とし、他方は道具を媒介とするということにつきるだろう。大工、左官その他の職人は手の延長である道具を使いこなすことが技術であった。工場労働者は機械を操作しなければならぬ。機械は道具の延長とも言えるけれど、すでに質的に別なものだ。一方は反復練習して熟練に達することが出来るが、一方はただそれだけではない。道具を使いこなすのとは別の意味で、機械そのものの構造その他を理解しなければならぬ。

近代産業は労働者を一ヶ所に集中し、新しい機械を使って、生産の質と量をかえ、そのことによって市場を確保し、独占への道を進んで行く。その近代産業が発達すればするほど、それは前近代的家内工業や、徒弟制度を

清算して、みずからを近代的機構に整備して行く。その過程で工場労働者もその整備にあわせて変身しなければならぬ。徒弟制度や職人氣質の尻尾をぶら下げながら、職人的職工は、近代工場労働者へ意識を転換して行った。

職人と呼ばれる前近代労働者はどうであったか。第一に近代産業に市場をうばわれて相対的にその市場をせばめられていった。第二になお徒弟制度などの旧来の雇傭システムをほとんど改めなかった。工場労働者が増えていくのとくらべれば、彼らは相対的には人口的比重を減少させていた。そうしたことをからめて工場労働者への反感も増していった。

職人たちの目からすれば、工場労働者の仕事は仕事とはよべない。職人は自分の肉体を仕事の対象にかゝらせて働く。板一枚削るにも大工の手や足や腰の筋肉は、その板一枚に集中する。むしろ大工の手にはカンナという道具がある。だがたとえば機械工がセーバーで鉄を削るとき、セーバーは道具の延長ではあっても手の延長ではない。成程、機械工は油を差したり、調節したりするだろう。しかしそれだけのことだ。仕事するのは機械であって、人間は機械の介添人でしかない。そんなものが仕事と言えるかと職人は言う。

工場労働者たちが大規模なストライキをするとき、職

人は労働組合を結成することすらが困難だった。それは彼らがより強い徒弟制度に縛られていたこと、分散していたこと、職場が（土木建築関係では殊に）一ヶ所に固定しなかったこと、彼らの技術が個人的なものであり、システムの中で生かされなかったことと、それから生じる職人意識、と言ったことに原因を求めることが出来る。

そこでさて、この節の始めに予告した言葉の問題に立ちもどろう。

大正の中頃になると、もはや労働者は普通の言葉になつてしまった。たとえば大正七年の米騒動、富山県下新川郡魚津町の漁民の女房たちによって火をつけられた越中女一揆と新聞に報道されたが、全国的な規模でひろがった段階で、騒動の主力となったのは、各種職人、日傭人夫、仲仕、土方、人力車夫、被差別部落民であった。当時の新聞の中にはこの人たちを一括して労働者と表現した記事がある。或いは第一次大戦後の不況を報じた大正八年三月十日の東京朝日新聞には、「不景気で労働者諸君は失業といふことかと思つたが職工には影響なくグラツキ出したのは人足連中だけ」という意味の記事がある。この記事は職工も人足もひっくるめて労働者と呼んでいるのだ。そのほか、当時の新聞などを見れば労働者

という文字はひんばんに出て来て、それが少しも珍らしくなくなっていることに気づかされる。

反対に政府が治安警察法で用意した労働者という文字は、政府や資本、つまり権力の側で発表した文書などに見られるが、一般的な用語にはなっていない。影がうすくなっている。

この現象を復活した労働運動が流行語を生み出したのだ、と受けとつても差しつかへはない。それは皮相な見解であるけれど、仮にその見解を認めるにしても、それは確実に定着していった。言葉もまた時代と共に生きるものである。

労働者という言葉に対する二つの受け取り方は相変わらず存在したであろう。けれどもそれは別に、力みもせず、かといって格別の反感も持たず素直に受け入れる第三のタイプの人たちが出て来たことも充分考えられる。

その人たちにとって、職人と職工は労働者という階級の中での分類であり、大工、左官、旋盤工、印刷工などは、更にその中の細かい分類という風に、彼自身がそのどれかである場合にも思つたろう。逆にいえば、大工も旋盤工も、自分が労働者とよばれることに大きな違和感を持たなかったであろう。それほどに労働者という言葉はふつうの言葉になつてしまつたと言つてよい。

当時の人たちに、医師も教師も銀行員も労働者だという戦後の労働法の規定を示したら何というだろうか。冗談は休み休みにしてくれと笑い出すに違いない。労働者とは正確に、労働する人間、という意味の言葉だった。労働者階級という言葉もその範囲から逸脱しない限りで有効な言葉だった。

ところで赤松克麿の「日本社会運動史」によると、大正八年に設立された主要な労働組合の中に、自由労働者組合がある。六月に設立され、人夫、車力、土工、薦、小揚、大工、左官、工夫、煉瓦工、屋根職、車夫等をもつて組織し、角田虎彦、野口一雄らが幹部であった、という。これは東京だが、大阪には同十一月に友禅染職工組合、京都には西陣織友会が発足している。職人や土工、車夫など組織困難な条件の人たちが組合をつくっているのだ。

更に近藤憲二の「私の見た日本アナキズム運動史」をのぞいてみよう。そこには大正十五年に結成された全国労働組合自由連合会の加盟組合が紹介されている。その中には関東自由労働者組合（江東自由労働者組合、自由労働相互会、千住自由労働者組合、横浜自由労働者組合）神戸自由労働者組合、朝鮮自由労働組合などの名を見ることが出来る。この自由労働者の自由は自由連合の自由

でなく、先にあげた人夫、鳶、大工、左官など工場外的、自由契約的労働者の意味での自由であらう。更に埼玉小作人組合、和泉漁業労働組合がある。ここに農夫や漁民を労働者としてうたがわれない考えが見られる。

もっと愉快なのは、岡山、広島、泉州、神戸などに純労働者組合があることだ。当時のことを知る人にたしかめれば断定は出来ないけれど、あえて想像すれば、筋肉労働こそ純粹の労働であり、役付とか、小頭とか、会社や親方の息のかかった者をのぞいた、直接の労働にたずさわる者こそ労働者だという考え方があったに違いない。そうでなければ、わざわざ純労働者と名乗る理由がない。

さて、大正の中頃から明治の初めにかけて、アナ・ボル対立、普選運動などをからめながら苦闘し続けた労働運動は、弾圧につぐ弾圧に屈せざるを得なくなる。満洲事変、中日戦争、第二次大戦とひろがる泥沼の時代が来る。すると新聞、雑誌から労働者の文字が消え、かわりに登場するのが勤労者だ。いわく勤労働員、いわく勤労学徒、そしてついには産業戦士などという奇妙な名づけまで飛び出して来る。

私の父は大正の末に九州から京浜に出て、昭和二十年の敗戦まで日本鋼管の庄延工場で働いていた。二十余年も同じ工場で働きながら、ついに役付きにもなれなかつた。

がただちに彼と労働運動とを結びつけることにはならなかつた。

だから父は積極的に労働者という言葉を使ったことがない。しかしそれが労働者に抵抗を感じていたのでない証拠に、他からそう呼ばれることを拒まなかった。会話のつながりからの必要では、それを口にしてためらわなかった。しかし、勤労者や産業戦士にはあきらかに抵抗を感じているようであった。積極的にも消極的にもそんな言葉は使わなかった。

敗戦のときに十六才になっていた私は、それ以前約二年間、父と同じ工場で働いた。そして父と同じような工場労働者をたくさん見た。

産業戦士なんて言葉を得意になって振廻しているのは、軍から派遣された監督官か、時局便乗型の会社のオエラ方ぐらいなものだった。そうして私自身もそういう言葉を余り好きではなかった。

もう少し詳しく説明すると、その頃の十代の少年の多くがそうだったように、私も予科練にあこがれる愛国少年だったから、かえって産業戦士の方にはあまりこだわらず、そのかわり、理屈っぽい少年だったから、勤労者の方にこだわった。何故そんな言い替えが必要なのか。労働者は労働者でいいじゃないか。呼び名を替えたらず

たが、それを悔むでもなく、役付き職工になることを望んでいた様子もなかった。はなから自分にはそんな才覚はないとあきらめて平凡で変り栄えのない二十余年をすごした。ろくに読み書きも出来なかったのである。

その父が何かの必要で、たとえば国勢調査とか、小学校の家族調査とかで職業を書かねばならないとき、必ず彼の口から出たのは職工という言葉だった。そういう書類を書くのはいつも長男である私の役目だったが、もつとくわしく書かねばならぬとき聞き直すと、もどてくる返事は、クレーン運転工または庄延工であった。日本鋼管が職制を改めて、職工を工員とよぶようになって、父はなかば習慣的に職工と自称することを改めなかった。

では私の父は、労働者という名辞で自分をかこわれることを嫌ったろうか。そんな気配を私は一度も感じたことはない。戦前戦後を通じて、労働運動には関心を持っていたことがなく、むしろアカ嫌いだった父である。さすがに浅原健三や、鈴木文治ぐらいの名は知っていて、ことに浅原についてはしきりに感心していた。だが、父にとっては、源為朝も、肉弾三勇士も、双葉山も、浅原健三も、同じように英雄であって、そこに何の区別もなかったのである。いづれ劣らぬ九州男児ということになるのだ。だから父が熱烈な浅原ファンだったとしても、それ

味が変わるのか。どうもうさん臭いことだと思った。つまり、勤労者なんて言葉が出来る以前、私にも労働者が普通の言葉だったのだ。労働者とか、労役者なんて言葉は知らなかった。

会社には労務課という課があって、職工の人事、給与、福利、厚生などをやっていたけれど、労働者なんて言葉はそこでも耳にしたことがなかった。だから私は、労働というのとは労働という意味ではなくて、労働者のいろいろの世話をする仕事、という意味の言葉だろうぐらいに理解していた。まったくのところ、労働者という言葉が私に耳にするようになったのは、戦後も大分たってからなのである。

(四)

戦後、労働者という言葉が拡大解釈されたいきさつ及び、それについての私の考えについては、第一回「語義の混乱」で述べた。

そこで今度は、すでに述べたことは省略しながら、かつ補足し、かつ別の視点から、労働と労働者について述べることになる。

第一にそれは、戦後労働運動の在り方、戦後資本主義の復活、その両者の押れ合い、ということから考えなけ

ればならない。

第二にそれは、生産様式の変化、流通消費の変化ということから考えなければならぬ。

昭和二〇年八月十五日、この日を境として再び労働運動はよみがえった。したがって労働者という言葉は再び市民権を得た。勤労者とか産業戦士などという言葉は、朝日の下の露のように消えた。労働運動はただよみがえっただけではない。それはかつて日本の労働運動史上に例を見なかったような激しさでひろがった。ごく短かい期間だけれど、シュトルム・ウント・ドラングと名づけていいような時期が戦後の日本にはたしかにあった。生まれたばかりの荒っぽさと幼なさと一緒に、新鮮な若々しさと力強さが、その時期の労働運動にはあったように思う。

戦前の運動を体験した人たちが指導者になったことは言うまでもない。しかし、そんな体験をまったく持たなかった人の方がはるかに多かった。そこに幼なさと力強さの因子がある。戦前派は自分の体験や知識によって戦前流の運動をやりとりし、戦後派は体験も知識もないから独創的にならざるを得ない。つぶさに見てゆけば、そこには様々な形の葛藤があったろうが、一刀両断的に言えば結局は戦前派の指導に戦後派が服するという形でお

しまったというべきだろう。

何事にせよ、経験者と未経験者がいれば経験者の方が指導的立場をとるのが自然だ。しかし古い者が自分の経験を押しつけ、新しい者がそれに迎合するだけだったらそこには退廃しか残らない。戦後の労働運動にもそういうマイナスの面がなかったらうか。たとえば徳田、志賀の出獄、それにもまして野坂の帰国の際の熱狂（当時としてはそれも無理ないことと言えは言えるにせよ）と、そうした人々を権威として祭り上げてしまった傾向、そして徳田らの独善的な指導。更にはそれを突き破り彼らを棚上げにしてしまうことが出来なかったことなどがある。

また占領下であったことの制約。謀略と弾圧によって厚い壁の中に閉じこめられ、労働運動は手も足も、もぎとられた。そうして占領が名目的にも終わったときには、朝鮮戦争特需で立ち直った資本主義とその権力は、すっかり足場を固めていた。

今更、二・一ストが決定されていたらどうなったとか、社会党内閣がもっと強力だったらとか、戦後の労働運動の主流が共産党や社会党でなくアナキズムだったらとか、朝鮮戦争に対する反戦運動や、占領軍に対する抵抗がもっと激しく盛んだったらとか、びを並べ立てるの

はやめよう。それらの一つ一つについて検討し直し、そこから教訓を導き出すことの効果はうたがわれないが、それはここでなすべきことではない。

戦後の労働運動は、朝鮮戦争の頃から反動的後退期に入った。そのころから闘争の敗北感と、指導部への不信感がきざし始めた。「共産党が政権をとろうと、社会党内閣が出来ようと、俺たちの暮らしは変わらないさ」という言葉をその頃から労働者たちは唇にしはじめた。

むろん、それに似た言葉がそれ以前にはなかった、と言うのではない。たとえば私は昭和二三、四年頃、九州の小さな炭坑の労働組合の青年部長をしていたが、坑夫や選炭婦たちが、労組の執行委員を呼ぶのに、「組合のお役人」と言っていたのをおぼえている。彼らはひやかしや戯談のつもりで言ったのではない。代官所のお役人とか、県庁のお役人と言うのと同じ感覚で言っていたのだ。会社の幹部もやはり会社のお役人だった。九州の片田舎の坑夫の感覚はその程度だったのだ、と思われても構わないが、それよりもそこに現れた組合幹部と組合員との断絶に注意して欲しいのだ。

同じ頃、組合役員が全国大会などで上京するとオーバーに着が出張旅費の余りで買えたという。上京期間中を出勤扱いにして会社から給料を貰い、山元の組合からと

その会社の組合の連合組織からと、県炭労から出張旅費を三重に貰うのだから、金が残って当然なのだ。私自身にはそういうことはなかったが一回の東京出張の旅費を五千元もらったときには、目ん玉がひっくり返るような思いをした。私の場合は長崎県炭労から旅費を支給されたが、山元の組合からは支給されなかった。

今でこそ五千元なんて、大金のうちには入らないが、そのころの五千元は今の五万円よりずっと値打ちがあった。昭和二三年に三島由紀夫が大蔵省国民貯蓄課を辞めたとき、八月分俸給の手取りは三四三六円九〇銭であった。オーバーだって当時は貴重品だった。まだ日本中のあちこちに空襲の焼跡が残っていた。旅行をするのに米持参でなければ旅館に泊めてもらえなかった。

そんな時代に私がもらったのと同じ程度の旅費を二重、三重に支給されたら、貴重品のオーバーも買えたに違いない。私のすぐ後に上京した同じ炭坑の組合長は、県炭労と山元から二重に旅費を支給されていたという噂だった。また同じ頃別の炭坑の組合役員をしていた友人は、組合出張で上京したとき、リュックサックを持って行き、炭坑町では買えない本をぎっしり詰めこんで帰ったという。

もっとひどい話が残っている。全国大会などがあると、

代議員たちのそれぞれの会社の東京本社から、労務課員

や経理課員が来て、弁当はおろか現金の入った封筒を配って歩いたという例がある。こんなことも私の経験にはなかった話だが、しかしこれとは違った別の経験ならある。先に書いたのは別な炭坑にいたとき、仮に××鉱業労組連合としておくが、大会代議員と出席した。私の所属した支部の〇〇炭坑の代議員は十人位だったと思うが、役員選挙になると〇〇支部の各代議員に配られた投票用紙は、白票のまま一ヶ所に集められ、或る代議員が次々と同じ名前を記入した。

以上のような例は炭坑の場合に限らないと見えて、他日、他産業の労働組合活動を経験した男に話したら、出張旅費のことも、会社側の金一封のことも、投票用紙取りまとめのことも同じ例をたくさん話してくれた。

勿論、こんなことに平気でいられる運動家ばかりではなからう。こういうことに反発した人も少くはないだろう。しかし事実としてこんなことが行なわれていた以上、つんぼ機敷におかれた労働者も何かを感じた筈だ。それが「泣く子と地頭」の「地頭」と同じような意味で「組合のお役人」という言葉になってあらわれたと考えて大した誤差はないだろう。そうして労働運動が退潮期にさしかかると、組合幹部、運動の指導者たちへの反感と不

信感に露骨になって来た。

右にあげた事例の中から私たちは、いわゆる労働運動家の明治壮士風の粗雑と思いがかりを感じとることが出来るが、それについて次のような話もある。

残念なことに私はこの話の典故を忘れてしまった思い出すが出来た。話の主人公の氏名も忘れてしまった。ただ戦後すぐに出た労働運動史の中にあった話、という程度の記憶しかない。いずれ、古本屋でもその本を見つけて出したら明らかに出来るだろうと思うが。

話の主人公は、昭和初期の共産党のかなり有名な人物である。有名な人物なのにその氏名を失念した私も、かつだが、すくなくともこの主人公氏自身は、彼の運動家または革命家としての声望が労働者の間に高かったことを自負していたようだ。

たぶん、三・一五事件の後のころだろうが彼は地下に潜って活動していた。官憲の追及がきびしくて、表の活動が出来なかったのであろう。ある日、彼は街頭連絡中に特高に見つかり、必死で逃げ出した。そのとき彼の目に工事中のマンホールが見えた。彼はためらわずに飛びこんで、そこで働いていた労働者に言った。「仲間よ。俺は共産党の××だ。特高に追われている。かくまってくれ」

彼にしてみれば、労働者のために死を賭して闘っている共産党だから、しかもその共産党の中でも労働者に名を知られた××なのだから、労働者が救いの手を差しのべてくれるのは当然と考えたのだ。だが。

「何を、この野郎」

が労働者の返事だった。つづいて彼は袋叩きにされ、哀れな姿で特高に引渡された。

この話を実話として受取るか、作り話として受取るかは読者の勝手だ。しかし、この話には笑い出したいような悲しさがある。自身の有名を過信した××の思い上りも、それを引き渡した労働者も、どちらも相互の断絶に気づいていないのだ。そうしてどちらも自分が正義だと信じこんでいる。(マンホールの中の労働者はアナ系だったのだらうという想像はうがちすぎて面白味を半減する) ××のような思い上りは、戦後の労働運動の指導者たちにも尾を引いて残ってはいなかったろうか。田中英光の或る時期の小説にはそういう奇妙な尻尾をつけた運動家が出て来て、戦後の労働運動がどんなだったかを私たちに確認させてくれる。

ともかくも、指導者に右のようなたぐいの思い上りがあったとすれば、それはいつか労働者から痛烈なシッペ返しをくらって当然である。

昭和三年だった。私は九州の小都市で自由労組の役員をしていた。自由労組は失対労働者を主体とする組合だが、私は適格証を持たない一般の日雇だった。朝鮮休戦のあとの反動で、失対はともかく一般の日雇は週に二日も仕事にありつければ、という状態であった。各支部へのオルグ、会議、団体交渉と忙がしかった私は、組合活動のために週に二日の仕事(順番で廻ってくる)さえ取り逃がしてしまうことが多かった。文字通り食うや食わずの有様だった。

そんな私に、或る日一人の仲間が冷めたい嘲りの言葉を投げつけた。

「この男は仕事嫌いだけ、仕事にゃいかんと組合の用事はかりしとる」

勿論、当時の××市自由労組には、役員に手当を払う経済力はなかったから、私たちは無給でがんばっていた。組合活動をサボれば行ける仕事を棒にふる。日雇が仕事にアブレたらどうなるか、一番よく知っているはずの仲間にもそんなことを言われて、私はカッとなって相手の胸倉をつかんだ。

あゝ、俺がこれほどまでに自分を投げ出してやっていたことが、仲間にはせいぜいこの程度にしか思われていなかったのか。私はそれからしばらく、指導者不信とは

逆の大衆不信に落ちこんでしまった。

ずっと後になって、私は自分の誤りに気づいた。恩着せがましく指導者ぶった私の思い上がりがあったからこそ、仲間の言葉をそんな風にしか受け取れなかったのだ。私はいつの間にかお役人根性になっていたのだ。私が本当に彼の仲間だったら、彼の言葉がさしあたりひどい誤解による中傷だったとしても、その言葉の奥の奥に横たわっている、労働運動一般、指導者一般への不信に気づくことが出来た筈だ。仲間の胸倉をつかんだとき、私は彼と私を区別していたのだ。労働者大衆とそれを指導する前衛という風に。

ザンゲめいた話はこの位にしよう。

戦後三十年の労働運動の歴史を短い紙数で述べるのは至難事だ。それに、いろいろいきさつはあったが、その後、労働運動から次第に遠ざかった私には、少くとも体験的にはそれを語ることが出来ない。

しかし、その後も指導者不信、組合不信は労働者大衆の中にひろがって行ったことは事実だ。組合は経済闘争と称して、ボリナスをいくら、月給をいくら値上げさせるかということに労働運動を限定し、政治闘争は邪道だともっともらしく言うことによって、権力との対決を避けるのに懸命だ。戦後の或る時期には曲りなりにも行な

われた工場自主管理など、今は思い出す様子もない。

一方、東大から高級官僚へのコース、企業内の重役コースという出世街道のキップが入手出来なければ、別のキップもあるというわけで、労働運動で有名になり、組織票をバックに末は議員か大臣かと、労働運動を当世出世術の手段としか考えていない連中が、ウソでなく本当にいるのだという。

そうした運動と指導者に大衆の不信感は見事に対応する。すでに昭和三十年代には、弁当と日当を支給しなければ、組合は大衆動員が出来ないという状況が出ている。ネットライキという新造語が出来たのもこの頃だったろうか。春闘だの、賃上げだのと言ったって、それは定期昇給と余り変り栄えもしない年中行事になってしまい、そのマンネリズムに労働者は生あくびをかみこらす。闘争なんてものは会社の上の方と、組合の上の方の適当な話合いで決まるさ。景気がよければ給料は何ぼか上るさ。ストライキ？ うちへ帰って寝とくよ。あとはおまかせ。これではストライキに緊迫感も悲壮感もない。

いや、私だって三池闘争のようを激しい闘争を忘れているのではない。しかし石油におされて斜陽化した炭坑の、首切りをとまらぬ命がけのそれと、昭和元祿高度成長下の他産業のそれとは同一には論ぜられない。

まったく、六〇年安保から七〇年安保へ、東京オリンピックから万博への時期、それが準備したインフレを考えなければ、見せかけながら目ざましい好景気が続いた。昭和四〇年代後半も例の石油ショックまでは、浮き立つような日々が続いた。

と、こう書いては異論もあろう。その間に危機感がまったくなかったのではなかったのだから。そしてベトナム反戦の運動もあったし、安保闘争や全共闘運動も私たちの記憶にまだなまなましい。一方に過疎の問題、他方に公害問題をかかえこんだ景気でもあった。

しかし空にはジェット機がほとんどぶつかりあわんばかりに飛びかい、高架軌道を新幹線が走り続け、陸には交通地獄とよばれるほどの自動車の洪水、海にはマンモスタンカーが巨大な航跡を、という時代でもあった。

どこか家庭をのぞいても、冷蔵庫と洗濯機とテレビが必ずあり、マイカーも珍しくなくなった。大工場では自動車通勤の労働者のためにモータープールを用意しなければならぬ時代である。毎年、海外旅行に出かける人も増えた。まさに消費ブームであった。原料らしいものはほとんど産出しない国で、工業生産は世界屈指という不思議な現象を不思議とも思わず、どこまで辻つまがあらうのか判らない消費生活の豊かさに溺れていた。

そんな中で労働者も変わった。何しろビートルズ風の長髪とジーンズと仕事中にトランジスタラジオでロックを聞くことを禁じたら大工も左官も、弟子になり手がなという時代になってしまったのだ。まして工場労働者たちが、もはや自分たちは中産階級なのだと信じこむようになってしまった。たしかに彼らの生活は、その父や、その祖父の時代とはくらべものにならないほど、物質的には豊かになった。

たとえローンの返済がまだ終わってなくても、たしかに自分の名で登記した家と土地をもち、ステレオや、カラーテレビや、Wベッドにかこまれて暮し、工場へはマイカーで出勤し、週休二日のレジャーにはドライブを楽しむ生活を、戦前の労働者の生活とくらべられようか。それはまさに戦前の水準で言えば富豪の生活ではないか。労働者（と言っても最も恵まれた層ではあるが）が自分たちを中産階級だと錯覚しても無理ないではないか。

いや、それは果して錯覚だろうか。

(五)

労働運動の在り方や、消費生活やが労働者の意識を変えた。だが、それだけを指摘して終ってはまだ足りない。現代の生産形態と、その中で労働を考えてみなくては、

画龍に点睛を欠くというものだ。

第一回「語義の混乱」の中で、私は工場労働者の仕事
が「綺麗で楽になった」と書いたが、それについて高島
洋から「いちがいにそうは言えないのではないか」と彼
の体験もまじえながら、やんわりと抗議された。

その抗議または指摘は、まさに正当であって、たとえ
ば製鋼工場と弱電器機製造工場とを一緒くたにしたよう
な私の文章の方に間違いがあった。また同一工場であっ
ても、職種による違いや、生産の分業過程での受持ち部
門によっても、労働の質や密度が違うことは当然である。
しかし、それらを認めてなお、次のことを考えねばなら
ない。

工場生産、すなわち近代産業が前近代の生産と違うの
は、道具から機械という変化だけでなく、分業のシステ
ム化というところにある。つまり一人の職人が原料の選
択採取から再選別、製造、仕上げまでを行ない、工程や
それ以前の製作プランまで担当するのでなく、それらの
全過程を細分化して幾つもの部門にわけ、それぞれ別の
人間にやらせるシステムである。F・W・テラー以来
の労務管理の歴史をふり返るまでもなく、それは機械を
とり入れた工場生産が、当然そうあるべくその生産形態
の中に内包していた属性でもあった。そしてそれは生産

の場合から熟練工を追出し、不熟練工と替えることでもあ
った。

もしかしたら人間は、労働が彼の生存にとって必要で
あることを認めながら、一方で労働の困苦を嫌悪する
性質を本能的にもっているのかもしれない。より少ない
労働で、より多くの生産物を得られたら、その剰余（物
質と時間）を有効に使って、より豊かに暮らせるであろ
うというごく簡単な理屈は、人間の欲望を刺激するに充分
であったし、人間の歴史はその欲望の実現の歴史だった
と言っても、あながち不当ではあるまい。

権力や資本はその欲望によって、剰余を収奪する者で
あるし、至福千年の理想は、剰余を公平に分配すること
だろう。

人間の歴史は彼が道具を手にしたときから始まる、と
は、もはや言い古された言葉であるが、道具を手にする
とは、より多くの生産という欲望につながっていた筈で
ある。そして道具は機械に飛躍した。機械はさらにそれ
が生み出された原理にしたがって、より扱い易く、より
生産性の高いものへと発展していった。

前に私は、職人と職工の労働の質の違いについて説明
したが、明治から大正、更に昭和へかけて工場労働者の
中にも職人気質が存在したことは否定出来ない。

それはまず初期においては、それまでほとんど日本人
が経験したことのない機械にむかって、その操作に習熟
し、熟練するという過程で、彼にそれを相伝してくれる
親方も父祖もなく彼ら自身が創始者にならねばならな
かったこと、したがって彼ら以前になかった工場労働者の
意識も、職人気質を継承せざるを得なかったろうこと
である。

そしてまた、その機械もまた、操作の熟練と不熟練の
差によって効率が違うという程度の、未発達な機械であ
ったこと、したがって熟練ということが職人意識を継承
したことである。

しかし、戦後のそれも昭和三十年代に入ると、工場生
産は更に進んだ段階に入った。資本主義は莫大な設備投
資によって新しい方式を採用した。たとえば弱電メー
カーなどに代表的に見られるベルトコンベアシステムで
ある。労働者はコンベアの各所に配置されて、目の前に
流れてくる工作物に単純な労働を繰返す。或る者はビス
を二本しめるだけであり、別の或る者は釘を二本打つだ
けというような、傍目には非常に馬鹿げた、しかし本人
には退屈で忙しい拷問のような労働、それはもはや労働
とさえ言えないかもしれない。

これによって資本は高賃金の熟練工を不要とし、不熟

練工にそれまでより少し高い賃金を支払うことで、総額
としての人件費を節減した。しかも熟練工は得難いが、
不熟練工はいくらでも替りがある。こんな味気ない仕事
はいやだ。まるで人間でなくてロボットみたいだと辞め
て行く労働者が多くても、次々と新しい労働力を得るこ
とが出来る。

更にこのシステムは、より少ない労働力でより多い生
産をの原理にしたがって発展して行く。コンピュータを
取入れ、工場全体を巨大なロボットと化してしまう。機
械の故障さえ機械自身がチェックする。しかもシステ
ム化された機械はカセット化され、故障した部分はカセ
ットをぽんと取替えるだけで、従前通りに渋滞なく動き出
す。代表的にはコンピュータがその例だ。

しかもこれらの例は、ただ或る産業にとっただけ採用
されている方法ではなく、大なり小なりどの産業でもこ
の傾向がある。たとえば取入れまでに数ヶ月を要する米
でさえ、人工的方法で一ヶ月で屋内で取入れる方法を真
面目に考えている科学者もいるそうだ。

もはや人間は機械を操作するのでなく、工場全体が巨
大なロボットとなってしまう中で、機械の番をするだ
けだ。おまけにコンピュータは生産計画から工程表ま
ではじき出してしまふ。人間は機械の番をするだけでな

く、昔の徒弟並みに機械の使い走りをやらされる。昔の徒弟は修業次第では職人となり、やがては親方となる希望もあったが、今の徒弟はいくら走り廻っても熟練工にはなれない。第一、人間が機械になれる筈がない。

こうして生産過程の中で労働は変質し、労働と呼ぶこととされたらわれるものになって行きつゝある。昔は労働者は自分が何をつくるのかを知っていたし、労働の対象は彼が手を加えることによって目の前で形を変え、目的のものが次第にそこに姿を現わした。そこにつくる喜びや手ごたえがあった。また分業といっても、Aの作業とBの作業とはつながりがあり、仕事のつながりが労働者同士の人間的つながりであった。分業であるとしても協力であった。

今では労働者は自分が何を作っているのかを知らなくてすむし、分業とか技術とかは人間の側にあるのではなくて、機械の中にシステムとして組みこまれてしまっていて、労働者は仲間とのつながりを労働の中で得ることが出来ず、ただ一日中機械とにらめっこして暮さねばならない。

労働者は工場という近代産業が生んだ新しい砂漠の中で、仲間から分断され孤独に生きなければならぬ。しかも資本の要求は機械の回転スピードを可能なかぎり速

めようとする。そのスピードもコンピュータがはじき出す。人間は機械に追い廻されて息をつくひまもない。同僚と無駄口をきくゆとりさえ奪われる。でなければバイブやバルブやタラップのジャングルの中で、人の姿を見つげ出すことが出来ない。再び言おう、ここにあるのは労働と呼んでいいのだろうか。

近年の工場労働者の離職率が高いのは、右のような工場の中で、取り残された労働者たちの孤独感のためだといふ。そしてその故にヒューマンリレーションが必要だと労働管理の専門家は叫ぶ。人間性というものを考え直さねばならぬというのだ。何のために？

勿論、資本がより儲けるために、労働者を人間らしく管理してやろうと仰言るのだ。そう、マイホームをお世話しましょう。レジャーのすごし方もお世話しましょう。セックスも管理してあげましょう。

こうして作り出されて行く新しいタイプの労働者群に、前述した労働運動の在り方や、消費生活の拡大をかさねてみよう。更にまた労働法の規定する労働者の定義をかさねてみよう。

そこにはもう、私が「筋肉労働だけが本当の意味の労働」と言った労働も、「他の何者であるよりも労働者ではない人間」と言った労働者の姿もない。だとすれば、

こういう現代に生きている私たちにとって、プロレタリアートとは何だろう。階級意識とは何なのだろう。労働者という概念が拡散しつつあるいま、私たちは改めてそのことを考えてみる必要があるのではないだろうか。

システム化し、しつづつある生産形態はたとえ社会主義国家が出来よう（ソ連その他を見よ）無政府社会が実現しよう、もはや逆もどりはしないだろう。それが今、全産業に及ぼさず、或産業では足ぶみ状態であったりするのは、技術的に実現が困難だからというより、市場の需要と販売力に規制されているからだと言った方が事実だろう。

経営の面でも、技術の面でも最も近代化が後れているといわれる土建産業も、この十五年ぐらいの間に驚くほど近代化が進んだ。職人たち一人一人の技術は、明治大正とくらべればどうやら低下したとは思えないが、熟練をおぎなう別の体系の技術が、工場生産やカセット化が職人の技術を不要にしたのだと解すれば納得がゆく。

ただし、そういう一般的な傾向の中で、なお純労働者と呼ぶべき多数の人の存在も事実であるし、それを見落してしまつては、それこそ一大事だろう。それは片手落ちなどということではなく、これまでに見て来たような問題を実は正しく見ていなかったということになるのだから。

あっちにぶつかり、こっちにつまずき、我れながらなめめらかとは、欲目にも言えない文章だったがここで終ることにする。おそらくこの稿の終ったところからこそ、最も重要な問題の展開があるのではないか、という指摘があるだろうと思う。それはそれでまた改めてまとめてみたいと思っている。

蛇足的に一つ。

戦後、労働運動が目ざましく復活してからというもの、労働者という言葉が一般的になって労働者の方は使われなくなった。しかしいつの間にか、土建労働者、港湾労働者、日雇労働者を呼ぶときに使われるようになったのは、そもそもどこの誰が始めたのであろうか。明治政府が労働者という言葉を使ったこの名辞は、戦後では最も労働者らしい労働者に対して使われているのである。

しかも、この場合は土建労働者などを労働者とは認めがたい、も一つ下級の者として扱うために区別した匂いがある。マルクスの共産党宣言の中にあるルンペンプロレタリアートの規定の影響であろうか。それとも封建時代そのまゝの身分意識のためだろうか。

しかし、いつの間にかそれはそれで定着してしまい、

土建労働者などが自分のことを労務者というようになった。一つにはやはり、労働者という言葉には、それが使われた当初からのいきさつもあって、労働運動用語的な硬いひびきがつきまといたといふことのためでもある。或いは、差別用語であるとか、ないとかを考へる手前で、そんなことにあまりこだわらず自称しはじめたということかもしれない。

読者からの便り

そして外から押しつけられた差別用語を逆手にとって「そや、俺は労務者や、そやったらどないや言うねん」と開き直るとすれば、そのとき立場は逆転して、労務者こそ人間という誇りの前で差別者は吹飛んでしまいうに違いない。

言葉へのこだわりから始めた文章を、言葉へ再びこだわったところで、今度こそ本当に終ることにする。

その一 長谷川武

イオム、御恵送感謝します。

宮崎君の無政府共産党批判は当を得ているなと思いました。

当時の新聞紙面には黒色ギャング事件として大きく書かれていたが、この黒色ギャング事件被告の中に爆発物取締罰則違反として私の名があります。これは私

自身、昭和四年の芝浦争議の時、応援のため奔走する中で坪井、牟田征紀の二人は農村青年社同人、小野長五郎と私がA.C.労働者聯盟同人、これに二見、其他三名程で芝浦工場及び社長宅を、私が千葉の鵜原に隠しておいたダイナマイトで爆破すべく協議しました。これが後に二見の事件で小野長五郎のスパイだったことがばれ、私は逮捕されましたが、私はこの事件を当時の新聞が報道したように黒色ギャング事件としか、現在もそうだったのだと思っています。

また、宮崎晃君といつも行を共にしていた八木秋子君とは農村青年社（目黒にあった）で二、三度会っています。何かこうなつかしい思ひです。そこが住居

だった鈴木靖之君は、戦後早々にあつた衆議院選挙に立候補したりし、それだけの人間だったのか、とがっかりしたような失望と不信をもったものです。

御健闘を祈っています。

（一九七五・五）

その二 中沢輝夫

イオム8号拝受、お礼を申しあげます。

宮崎晃君の無政府共産党への批判を興味深く読みました。編集部がその前文に「われわれは無政府共産党と農村青年社を相容れざる敵対物としてとらえる視点、そこから一方が他方を全否定するのみという視点は不毛だと考えている」とあるが、過去を省みて全面的に賛成です。己れの考えだけが絶対であり、些細な方法論的なものすらも、少しでも違ったもの（人）はすべて叩き出してしまうというやり方が、むかし全国自聯や黒連を内部からこわしてしまつた最大の理由です。そのいわゆる純正無政府主義者の中に私もいたのでした。八太さんと仲がよすぎたのかもしれない。慚愧にたえぬ次第です。運動が行き詰って必然的に視野が

狭まり、一種の強迫観念というか、そんなところから絶望的な行動が出てきたことと思います。

宮崎晃君とは新聞労働連盟でしばらく一緒でした。彼が日立争議で久原邸焼打ちで入獄した後、その後一度も逢っていませんが、なつかしい名前です。一緒にいた八木秋子君とは数年前ベ平連の何かの会で一度逢いました。その時、「いつ中沢さんたちに殴り込みにこられるか」とのような日が続いたこともあった」といわれて、赤面したものでした。

戦線に立っていないものはアナキストではないという考え方はいまでも変わっていません。だから、私などあえてアナキストとは言ひ得ませんが、アナキストチックな考え方をもって生きている人間だといえましよう。

あなた方の活動力に溢れる生き方をみると羨ましい限りです。そして今になっていろいろと知られることを大いに楽しみにしている次第です。

無政府共産党というものの、相沢君もいろいろといつてはいるが、みんな二見君に踊らされていたのではないかと私はいまでも思っています。私は二見君とは非常に仲が良かったのですが、思想的に共鳴したからではなく、不良少年仲間としての間柄でした。摩耶山で

の事件などもそうした二見君の性格を考えて見ることも一つの要因にならないか、などとも思っているわけ

です。

とりとめのないことを書きました。(一九七五・六)

季刊『イオム』

バックナンバー ごあんない

第8号(七五・五) ￥二五〇

「日本無政府共産党」への批判
アイルランド問題の理解のために(上) 宮崎 晃
▲詩▼ 亡 霊 ワット・タイラー
高島 洋

第7号(七四・一二) ￥二五〇

講演記録・日本無政府共産党
▲聞き書き▼ わが回想 相沢 尚夫
「平民大学講演会」について 塩長五郎
河本乾次

第6号(七四・九) ￥二五〇

江西一三とその時代(完結)
ある疑問のとばくち 向井 孝
▲詩▼ 風景 寺島珠雄
山口 英

第5号(七四・五) ￥二五〇

労働に関する断章(一) 日野善太郎
ヨーロッパの旅(三) 平山房子
まぼろしの新聞ゼネスト 和田英太郎
(以上送料当方もち。1、4号は品切れ)

編集後記

◎今号は日野さんの力作「労働に関する断章」の最終回です。

今回は量、内容ともに最終回にふさわしい力編です。五回にわたる連載執筆の労に對し敬意を表したいと思えます。この上はぜひとも読者諸氏のご高評をお願いいたします。

◎合評会の記、休載しました。それに代わるものとして「読者の便り」のページをとりました。8号に宮崎さんの論文が載って以来、各方面より「無政府共産党」に関するお手紙を沢山いただきました。ありがとうございます。

◎「アイルランド問題の理解のために」は筆者の都合により休載します。ご諒承ねがいます。(M E D A)

◎長く暑い夏。例年にならない暑さという今年の夏は、去る五月一九日の「東アジア反日武装戦線」への大弾圧によって幕が落とされ、権力の攻撃と人民の抵抗の攻防の中ですぎつつある。血ぶくれた日本帝国主義・戦後三〇年目の八月一五日はまた、虐殺・即決処刑された三戦士の新盆でもあった。三つの若き精霊よ安らかに眠れ。(T O)